

白王伝

—神聖ローマ帝国の勇者たち—



mkSa

白王伝

—神聖ローマ帝国の勇者たち—

mkSa

序章

私の声が聞こえますか？ あなたをずっと待っていました。ここはあなたの世界とこれから始まる物語の世界をつなぐ、いわば狭間の世界。あなたはこれから主人公のマックスとなってハプスブルク王家の者たちと共に旅に出ます。長い旅になりますから、何度休んでもらっても結構です。しかし覚えていてください。仲間たちがいつもあなたの帰りを待っているということを。

私ですか？ 私もこの物語中の住人です、旅を続けていれば私に会うこともあるでしょう。そして、この物語を読み終わる頃あなたは、マックスたちと同じ何かを得ることができるはずです。

さあ、用意はできましたか？ それでは、行ってらっしゃい！

目次

序章1

第一章 神聖ローマ帝国 ―ハプスブルク家―3

第一章 神聖ローマ帝国 —ハブスブルク家—

そのひんやりとした空気と、独特のしんとした雰囲気。物寂しさの中に聖なる何かを感じた。目を細めるほどの長堂には細い柱が立ち並び、それらはアーチの断面を水平に押し出した高天井・穹窿^{ヴォールト}にまで達している。色彩に欠け、一見質素に見えるが非常に細かな装飾を施された窓枠にはステンドグラスが所狭しとはまっている。これほどまでに細く長い身廊を持つ聖堂は他にない、ゴシック教会・岸辺のマリア^{II}である。



1: 岸辺のマリア教会とその穹窿
Maria Am Gestade und ihr Gewölbe

ステンドガラスの向こうで雷の光が

はとばし
迸り、数秒後にはとてつもない轟音を

たてた。稲光で教会内が一瞬明るく照らされる。刀を構えた男が、雄叫びを上げながら誰かに斬りかかろうと突進していた。顔は見えない。男の走っていく先には全身黒づくめの、神官のような男が構えていた。その神官が持っていた杖を天に掲げると、数えきれないほどの轟々と燃える炎の球が教会の屋根を打ち破って侵入し、まるで意思があるかのように、斬りかかろうとする男に襲いかかった。

「カグ・ラン！」

刀を持った男の後ろ、大きな剣を背負った男が大声を発した。すると外で煌めいていた雷がみるみる青い龍と化し、窓を割って教会内に入り込む。龍は空腹だとばかりに炎の球をことごとく飲み込んでいった。片手をあげたままの神官に、刀を背中まで振りかぶった男が狙いを定め、斬りかかる。

「エンク・ブラッツ！」

さらに別の声、少女と黒メガネをかけた男が同時に叫ぶ、前に伸ばされた少女の手からは光が、男の手からは闇が放出され、今まさに振り下ろされようとしている刀を包んだ、そして遂に、魔法の力を帯びた刀が神官を捉える。途端、爆発でも起きたかのような凄まじい音が轟き、教会内に赤い光が広がった。

「ッ…!!!」

そこで少年は目をさます。ベッドから手をのぼし、ナイトテーブルの上で騒ぐぜんまい式目覚まし時計を止めた。カーテンを開けると、朝日が優しく差し込んだ。少年は少し眩しそうに眼をつむりながら窓を開ける。まだ涼しげな春の風が入ってきて、プルネットの短い髪を撫でる。少年は大きなあくびをしながら部屋を出ていった。彼の名前はマクシミリアン・ヴェイローサー、14歳。皆からはマックスと呼ばれていた。もやもやした頭のまま後ろ手で部屋のドアをぱたんと閉める。マックスは最近ずっと、同じ夢ばかりを見ていた。

ここはヨーロッパの中心に位置する大国オーストリア。ここで敢えて大国というのは、そこが現在のオーストリアとは見た目も大きさも全く違うからである。1725年のオーストリアは神聖ローマ帝国として、現在のオーストリア（それも上・下オーストリア、シュタイアマルク、ケルンテン、チロルなどの諸連邦、それにボヘミアとハンガリーが付け加わった国）、チェコ、スロバキア、イタリア北部などの巨大領土を支配する大帝国だったⁱⁱⁱ。そんな国の首都ウィーンにマックスは住んでいるのだ。

階段を下りて台所へ行くと、肉の脂がはじけるなんとも美味そうな匂いがした。

「どうした、気合が入ってないぞ。飯のまえに顔あらってこい」マックスの祖父アダム・ヴェイローサーの手元は休まず動いている。「ついでに、もう着替えてくるんだな」

軍人だったアダムは当時高齢とされていた54歳にしてなお健康な体を持ち、背筋もピンと伸びていたのも、もともと高い背が、より高くみえた。黒いジャケットに鹿革の白いキュロット、そして革の長靴。アダムはスペイン乗馬学校の校長である。スペイン乗馬学校といっても学校がスペインにあるわけではなく、その名前は、学校の馬がスペインから来たということに由来している。皇帝や偉い軍人だけのために作られたこの学校の長であるアダムは、ウィーンの誰からも尊敬されており、人望も厚かった。

「おい、何をちんたらやってんだ！早くしねえと朝飯食う前に日い暮れちまうぜ」アダムは階段の上に向かって叫んだ。ドタバタする音が聞こえる。牛肉と豚肉に玉ねぎを加えたオーストリア風ミートローフ・レバーケーゼ^{iv}をひっくり返しながらアダムは呟く。「まったく、あのちんたらさは誰に似たんだか……」

すると玄関が開き、朝のさわやかな風と一緒に元気な声が「アダム様」と入ってきた。

「馬屋の掃除が終わりました！」

二十歳前後の青年は部屋の匂いに気づいて、目を輝かせる。

「う～ん、良い匂いですね！……今日は誰に乗って出かけられますか」



2 レバーケーゼ
Leberkäse

「おう、ご苦労さん。サンテミリオン号とパスパトゥ号に鞍あ着けとい
てくれ」アダムが顔を少しゆるむ。「だがその前に、まあ牛乳でも飲ん
でけや。あの野郎が遅えから、当分出かけられそおにねえ」



3 ノリーカー
Noriker

広大な田畑を2頭の馬が疾走する。茶
色で細身のサンテミリオン号にはマック
スが、黒色で体格の良いパスパトゥ号に
はアダムが乗っていた。2頭ともノリー
カーというオーストリアを代表する鞍馬

で、静かな大地には2頭が力強く走る音だけがこだました。首都に住ん
でいるとはいえ、都と言えるところは皇帝の住む王宮の周りのみで、戦
争に備えた分厚い防御壁の外側は、馬やなにやらを使わなければ移動す
るだけで日が暮れてしまう。30分ほどでその防御壁が見えてくるが、
1680年におおよそ完成したこの壁は1683年の第二次トルコ軍ウ
ィーン包囲の際、大いに活躍した。

さて、その堅固な壁の周りには大勢の人びとが積み荷を積んだ馬車や
羊などの家畜とともに都に入ろうと、検閲のために列をなしていた。2
人は、誰も並んでいない方の門へと馬を走らせていく。

「おはようございます、アダム様」兵士が敬礼し、門を開ける。「そし
てマックス君」

そう、この門はアダムや皇族、
上級貴族のように特別な地位を
持つ者しか通ることができない
のだ。



4 防壁のあったころのウィーン
Vogelschau auf Wien von Norden, 1609

門を抜け少し行くと、人々が縦横無尽に行き交い、あちらこちらから

商人の声がする市場にでた。マックスとアダムは馬から下りて、引きながら市場を抜けた。

「おはようございます、アダム様」こんな人が多いのにもかかわらず、2人を見るものはみな、頭を少し下げ、挨拶する。「そしてマックス君」朝から精が出ますね、マックスも笑顔で市民に応えた。西の大国フランスに負けず劣らずの大帝国、その首都は活気に満ち溢れ、日が高いうちは汗をかいて働き、日が沈めばお気に入りの酒屋でジョッキを交わし歌い、踊る。そんなウィーンの人々がマックスは大好きだった。

マックスとアダムが向かった先、スペイン乗馬学校^{vi}は王宮内にあった。20人ほどの精鋭のみが、バロック建築の巨匠フィッシャー・フォン・エルラッハの手によって数年前にできたばかりの屋内馬場^{vii}での練習を許されている。そんな中、兵士でもないのにそこでの訓練を許された例外がいた。

「おはよ、マックス君！」純白の馬にまたがって、マックスやアダムとおそろいの乗馬服を着た少女が満面の笑みで学校の馬場に入ってきた。



5 マリア・テレジア
Maria Theresia von Österreich

「アダム先生も、おはようございます」

少女の名はマリア・テレジア、8歳。テレジアこそ皇帝の長女、つまり帝国の第一皇女である。マックスとテレジアは幼馴染みで、テレジアが生まれた時から2人は友達だった。皇女の肌は雪のように白く口元は赤く清らか、髪は輝く銀色で、乗馬のためにその長髪はその小さな頭の後ろで丸く

束ねられていた。

「いや〜、こんなに天気がいいんだから、外で乗りたいもんだよ」これまた純白の馬にまたがって、真っ赤な貴族の服を着た少年が、きびきびと馬場に入ってくる。「ダメかな、アダム先生」

この生気みなぎるはつらつとした少年の名はフランツ・シュテファン、17歳。2年前にテレジアと婚約し、祖国ロートリゲン公国をあとにして、ウィーンへと越してきた。彼の獅子のような金髪はマックスと同じであちこちに跳ねているが、輝くような鷲色の眼は彼の高貴な生まれを物語っていた。テレジアは現皇帝であるカール6世



6 フランツ・シュテファン
Franz Stephan von Lothringen

の愛娘、フランツは次期皇帝候補のナンバー1、そして乗馬学校長の孫であるマックス、この3人こそが特別に馬場を使わせてもらっている例外である。

「フランツは駄目よ、まだそんなに乗馬上手くないんだから。マックス君ぐらい上手くならなくちゃね」

テレジアの言う通り、マックスはこの乗馬学校で誰よりも乗馬がうまかった。



7 スペイン乗馬学校
Spanische Hofreitschule

「あ、そう……なんだよ、肩もっちゃってさ」フランツが口を尖らせて悔しがる。「でも剣術だったら俺の方が数段うえだぜ」

ああだ、こうだ、言いながらも3人は真剣に乗馬訓練に励んだ。アダムが厳しいというのもあるが、皇帝から認められるほど

3人の乗馬に対する情熱は強かった。スペイン乗馬学校では、リピッツァーナという種類の雄馬おすうましか使用しない。これこそ、スペイン馬の血統を継ぐ、皇帝のための馬種なのだ。だから3人は子供とはいえ、みな、体格の良い大きな白馬にまたがって練習した。

皇帝謁見の間。壮麗華美という言葉を実世界に再現したような大広間である。真紅を基調に金色の模様が施されたその中心には黄金の巨大シャンデリアが、優雅に燃える無数の蠟燭を支えている。更にその奥手にある黄金の玉座には神聖ローマ皇帝、ハンガリー王、そしてボヘミア王であるカール6世^{viii}が王者の威厳を持って座していた。皇帝の隣には召使いがいて、アダム、そしてもう2人の男が皇帝の前に膝をついている。



8 神聖ローマ皇帝カール6世
Karl VI. des Heiligen Römischen
Reiches

「やはり、」皇帝が重い口を開いた。「余が行かねばならぬようだな……」

「しかし陛下！」年を取った召使いが慌てて皇帝に向き直る。「先代皇帝ヨーゼフ様もあそこへ赴いたまま帰ってきておりません！ その上、トルコ軍の侵略が今まさに行われようとしている中、陛下までがあそこに赴けば、この帝国は……」

「その心配はご無用です」胸に栄誉あるバッジをたくさんつけた男が顔を上げ、言った。男の名はオイゲン・フランツ、通称オイゲン公。フ

ランス人にも拘わらず、数々の戦でオーストリアを勝利に導いてきた大將軍^{ix}であり、帝国領土内に無数にある宮殿の主でもある。「トルコ軍は、

「私^レ目が命に代えても撃退して見せます」

「しかし！」召使いは、つばを飛ばしながら反論する。「10年前に待望の男児が夭折なされて以来陛下には未だお世継ぎがないのですぞ！ そんなとき皇帝不在ともなれば、トルコだけでなくフランスなどの隣国が次々と攻め込んでくるのは火を見るより明らか！」

「むう、」皇帝は手に持った節刀を眺めていたが、そこからふと目を離すと、自身の目の前に跪く青年に視線を向けた。「どう思う、エルラッハよ」

「父のいう話では、」質素な格好をした男は答えた。「陛下の兄上がそうであられたように、選ばれしもの、父の推測するところではハプスブルク家の血を引くものが行かねばならぬ、ということでした。それに、このまま誰も行かねば帝国どころか全世界が滅亡してしまうでしょう」



9 オイゲン・フォン・ザヴォイエン
Eugen Franz von Savoyen-Carignan



10 フィッシャー・フォン・エルラッハ 「意見具申……よろしいでしょうか」 アダ
Joseph Emanuel Fischer von Erlach

フィッシャー・フォン・エルラッハ、32歳。エルラッハの父は世界一の建築家であり世界中を旅していたため、皇帝の良き相談役であった。その父が亡くなった今、息子であり自身も超一流の建築家であるエルラッハが、皇帝の相談役となっているのである。世界一豪華と謳われる王宮図書館やスペイン乗馬学校の屋内馬場を設計したのもエルラッハである。

ムが顔を上げる。

「ああ……申してみよ」

「この状況……やはりテレジア殿下が向かう他、手はないかと思われ
ます」

皇帝の頬がピクと動く。誰もが口にしまいとしていたことをアダムは
平然と言ったのけた。

「なっ、なあにをバカなことを！ テレジア殿下はまだ8歳ですよ、そ
んな子が行ってどうなるんじゃ！！」

「若いゆえに才気溢れているのです」召使いが怒鳴るのを他所に、アダ
ムは冷静に続けた。「馬術の腕も毎日、目を疑うほどに上達しています」

「そなた、」オイゲン公の言葉にも苛立ちが感じられた。「息子夫妻をな
くし、なお何もわからんのか。英雄と呼ばれたそなたの息子ですら、あ
そこから帰ってこぬのだぞ。それを、あろうことかテレジア殿下を送り
出せなどとは！」

「アダムよ、」皇帝が閉じていた目をゆっくりと開く。「余は、そちがそ
う言だろうと思っていたぞ。明白、テレジアを呼びもう1度話し合おう
ではないか」

再び議論が始まろうとしたが皇帝が節刀を宙に掲げると皆は沈黙し、
それぞれ謁見の間を後にしていった。

王宮の庭、ブルクガルテン^{al}。手入れの行き届いた美しい花畑に、行
き交う王族貴族たちに優しい木漏れ陽を与える青々と茂った木々、噴水
の周りでは貴婦人たちが話に花を咲かせていた。そんな中、威風堂々と
聳える王宮図書館前でマックスとフランツは剣の稽古をしていた。テレ
ジアはその横、一際大きな樹木の下で2人の妹と遊んでいる。夏の暑さ

は馬にも良くないため、乗馬訓練は涼しい午前中だけなのである。

「なあ、」フランツが素振りを止め、マックスの方を向く。「また勝負しないか。俺とお前、どっちが強いか……」



11 ブルクガルテン
Burggarten in Wien

「ダメよ！」テレジアが妹たちから目をはなし、間髪入れずに言った。「あなたが勝つに決まってるじゃない！ この間だって、マックス君がかわいそうだったわ！ それに……」

すっ、とテレジアの肩に手が置かれた。手の主はマックスだった。もう片方の手には木刀が握られている。テレジアはため息をつき、妹たちに言った。

「……行きなさい、フクスイおぼさんのもとへ。いい子はこんな野蛮なもの、見てはいけないわ」

「いやよ、お姉さま」上の妹が首を横に振る。「アンナ、お姉さまと一緒にいたい！！」

ほんの少しのやり取りのあと、その妹はしぶしぶと小さい妹の手を取り、王宮へと戻っていった。それを見送ると、フランツはマックスに向き直る。

「こっちはいいぜ、マックス！」ニヤッと笑い、剣を置いて木刀を握った。

2人の少年が向かい合う。祖父アダムに似たのだろう、マックスは年に見合わず背が高くしなやかな筋肉を備えており、こうしてフランツと並んでも体格差はあまりなかった。

「さあ、来い！」フランツが木刀の切っ先をマックスに向けた。

はっ、と短く気合いを入れるとマックスは旋回し、右手に持った木刀を遠心力と合わせてフランツのわき腹に叩き込んだ。

「お前、また新しい技を編み出したな」

フランツは木刀で、その太刀をぎりぎり受け止める。しかしその威力は確かで、フランツの木刀は細かい木片を飛ばし、欠けていた。

「点数を付けることは出来ねえが、まあ努力賞と言ったところだな！！」

フランツが剣戟を弾き、攻撃に移る。途端にマックスは防ぐことで精いっぱいになった。フランツは、わざとマックスが防げるように加減していた。木刀を振り回し、必死で逆転の機会を見計らうが、フランツに隙はできない。加減しているとはいえ、余裕を見せ隙を作るフランツではなかった。それでもマックスは反撃の機会を待った。1分ほどしたらどうか、急にフランツが攻撃をやめる。

「やめだ、やめだ。これ以上は弱い者いじめんなっちゃう」

「もともと知ってたくせに」

「でもこいつ、みるみる強くなってくんだぜ？ 俺の方が3歳も年上……っ！」

このまま負けて堪るか。フランツの下げた木刀に、息を荒げたマックスが木刀を強くあてた。

「おまっ、ほんとに負けず嫌いだなあ」フランツが一步退く。

すかさずマックスは木刀を両手で握り、フランツの胸へ突きを入れる。フランツは紙一重でそれをかわすが、マックスはすぐに木刀を自身の胸元まで引き、再び突き出した。

「突きなんて荒業、どこで覚えたんだよ……それにこの連撃ッ！！」

マックスの剣閃を正確に捌いていくフランツ。少年たちの汗が太陽の

光に輝き、退屈な宮廷暮らしに辟易していた貴婦人たちも集まってきた。6度、マックスの木刀が空を貫いたところでフランツは自身の木刀を大きく横薙ぎし、マックスはそれを回避するために後方へと跳躍した。

「腕を上げたな。なら、俺の新技も見せてやる…… 覚悟しろ！！」

フランツが今一度攻める。力はないが、スピードある左右上下斜めといった乱撃の後、マックスの防御に隙が生まれた。すかさずフランツは頭上に構えた木刀を握る手に一層力を込め、マックスの脳天に振り下ろした。マックスの防御は間に合わない。

「必殺、カイザーミューレン！！」

顔面直撃を恐れたマックスが顔を横にそらせた一瞬の隙にフランツは先ほどのマックス同様半回転し、木刀で自身を中心に円を描くと、マックスのわき腹に当てた。周りから拍手歓声が巻き起こる。

「はい、また俺の勝ち！」

フランツが勝利宣言すると、マックスはその場にあおむけで倒れた。ふさふさの芝生が少年の身体を柔らかく受け止める。マックスはそのまま寝てしまった。

「まったく、こいつぁ……絶対、夜とかに訓練積んでるぜ！」

すると、王宮からエルラッハが出てきた。

「エルラッハ！」フランツとテレジアは、マックスをその場に残してエルラッハに駆け寄る。2人を見、エルラッハは一瞬顔を暗くしたが。

「これはこれはフランツ様、それにテレジア様」と笑顔を取り繕った。

「おや？ マックス君は一緒にないのですか」

「マックスなら」フランツは、後方で寝ているマックスを指差す。「寝てるよ、天気いいから」

「それよりエルラッハ」テレジアがぐっと身を乗り出す。テレジアの眼

差しは好奇心に溢れ、その銀青色の瞳は言葉通り輝いていた。「今日もおはなし聞かせて！」

エルラッハは世界中を旅した父親の体験やその他の逸話を聞き、その全てを記憶していた。フランツ、テレジア、そしてマックスの3人は、彼が王宮を訪れる度にその冒険談を聞くのを楽しみにしていた。

「そうですね……」エルラッハは皇女の申し出を快諾した。「じゃあ今日はアージャのヤーパンという国^{III}について話しましょうか」

エルラッハの話は2時間にもなったが2人はその間ずっと目を輝かせ、最後の方はマックスも起きてきて聞いていた。エルラッハには語りの才能があった。エルラッハの語りには、聞いている者を違う世界へと誘う力があった。語り終わると、エルラッハは持っていた皮袋から水筒を取り出し、水を口に含んだ。3人はまだ興奮さめやらぬところだった。

「すげえ、そのサムライっての！ 1000の兵を1人で！ 1夜にして全滅させちゃうなんて！！」フランツが木刀を振り回す。「1度闘ってみてえ！」

「それよりわたしは、サクーラっていうのが見てみたいわ」テレジアは夢見心地でいる。「ああ、なんて美しいんでしょう」

「あなたたちは、」エルラッハは3人の目を見て言った。「あなたたちはもしかしたら、今私が話したのより、もっと偉大な冒険をするかもしれません」

3人には、エルラッハの言っている意味が分からなかった。

「どおした、」倒れているマックスをアダムが叱咤する。「もっと強く打ち込んで来い！」

その夜、マックスはアダムに剣の稽古をつけてもらっていた。これは2年前、ウィーンに来たばかりのフランツに剣で負けたその日、マックスが自身でアダムに頼んだことだった。アダムは孫の初めての願いを聞き入れ、喜んで稽古をつけた。しかしそれでも元軍人という性格から、稽古は決して生易しいものではなかった。

「聞けば、今日も勝負して負けたそうじゃあないか。悔しかったら強くなれ！」

まだやれる、マックスは荒げていた息を整える。そして、右手に力を込めて剣を握りなおし、震える左手で身体を支え立ち上がった。アダムがニヤリと笑う。

「そうだ、それでこそワシの孫ってもんよ！」

マックスは木刀を構え、この2年間一撃すら入れたこともない祖父に向かっていった。今日こそは目に物見せてやる。未来ある少年の雄雄しい咆哮が、夜の大地に木霊しては消えていった。

再び皇帝謁見の間。そこには昨日集まっていた面々と、その真ん中にテレジアがいた。話を聞かされた少女は顔を真っ青にし、黙っていた。いくら聡明なハプスブルクの皇女といえど、現状把握をするのが精一杯だった。

話の内容はこうである。14年前、オーストリアのあちこちで災害が起きていた時、エルラッハの父は言った。この災害はこの世界ではない違う世界が関係している、と。そうしてカール6世の兄、先代の皇帝ヨーゼフ1世がその線で調べていると、ハプスブルク家に伝わるある書物にこう記されていた。

「災害によりてその国ほろぶる時、選ばれし者ども立ち上がりて意志の

世界へと旅立ち国を救わん」

ヨーゼフ1世は、当時英雄と謳われていたマックスの父ゴットリーブ、大將軍オイゲン公の弟ルイ・ジュールと共に意志の世界へと秘密裏に旅立った。その後、災害は収まったが3人が帰ることはなかったという。

「決して無理強いはしない」皇帝は愛娘に言った。「そちが行かないならば、余が行くまで……」

苦渋の選択に誰もが沈黙する中、テレジアは父を見た。皇帝という威厳を手放して、1人の父親としての苦悩に沈む青い目を、うなだれる肩を。

もし、とテレジアは思う。もしわたしが男子であったなら、きっとお父様は、わたしが止めるのも聞かずそこへ行ったはず……もしかしたら、わたしにはなにも言わずに旅立たれたかもしれない。きっと、そう。そんな父が今、わたしに全てを語ってくれた。わたしが男子でなかったがために……

生きて帰って来れないかもしれない。怖い。怖い、けれどわたしには恐さより強く感じる物がある。この国が、大好きだから。この国を、守りたいから……

「行きます！」その目は真っ直ぐに皇帝である父を見据えていた。「わたしが行って災害を防ぐことができるのなら……わたし、行きます！」

みな、驚いた顔をしている。すると、バンっという音がし、謁見の間のドアが開かれ、マックスとフランツが入ってきた。

「ぜーんぶ、聞いてたぜ！よく言ったな、テレジア。危険な旅つつうなら俺が守ってやる。お前も行くよな、マックス？」

ああ、とマックスは大きく首を縦に振った。

「何を言うか！」召使いが目をかっと見開く。「子供の遊びじゃあない

のですぞ！帝国の運命がかかっておるんじゃ！」

「お前こそ何言ってるんだ、俺あ強いんだぜ！」

「話を聞いていなかったのですか！」オイゲン公も興奮している。「ワシの弟や、英雄と呼ばれたアダム殿の息子まで帰って来れていないのですぞ！！」

一瞬、その場がしんとした。

「エルラッハよ、そちはどう思う」黙っていた皇帝が口を開く。

エルラッハは少し間を置き、そして言った。

「私も一緒に行かせてもらえないでしょうか」

召使いとオイゲン公は驚きに目を丸くしたが皇帝とアダムは口元に笑みを浮かべていた。世界中の建築現場を回り、荒くれの集う土方を統率してきたエルラッハの身体は余分な脂肪など全くなく鍛え上げられており、マックスたちの視線から見るエルラッハの背中が広く、逞しかった。喜んでエルラッハの元に駆け寄ったマックスたち3人は改めてその青年の頼もしさを知る。

「ようし、分かった！！」皇帝が声高々に宣言する。「そちらを意志の世界へ遣わそう。早い方がよい。明日には旅立ってもらおう。正午きつたり、ローマ・カトリック・ルプレヒト教会で！」

☆

旅立ちの日は雨だった。雷がひっきりなしに鳴っている。13世紀より、ウィーン最古の教会として帝国の首都を見守ってきた聖堂ルプレヒト^{xiii}には、会議の場に居合わせた者、そして一人の司祭が集っていた。司祭は紫色の上祭服^{xiv}を纏い、その左手には金色の権杖が握られていた。

旅立ちは、ごく秘密裏に行われた。

「おぼよ、昨日は良く眠れた？」

「どうしたんだよ、お前」

先に着いていたテレジアと一緒にフランツが、包帯だらけのマックスを見て顔をしかめた。

「ったく……どおせアダム先生に喝いれられたんだろ」

敵わないな。マックスは笑って頷いた。

3人はハプスブルクの家紋である双頭の鷲が入った武具を身に着け、大祭壇の前に立っていた。エルラッハだけは、自ら武具の着用を辞退。老婆心にかられた皇帝は自ら最高の衣服を下賜し、それを着るように命じていた。

「準備は良いな、決して死にに行くのではない。必ず生きて帰ってくるのだぞ」

皇帝はじっとテレジアを見つめ、それから全員の顔を見た。

「はい！」

4人の声が重なった。大祭壇に立つ司祭が、こちらですと近くに促す。

4人が近づくと、司祭は天を仰いだ。

「神よ、ここに集いし勇者たちを守り給え！」

皇帝も、アダムも、その場に居合わせた者みな神に祈りをささげた。祈りが終わるとエルラッハが一步前へ出、マックスたち3人に向き直り、未知なる言語で何かを唱えだした。4人の身体がみるみる金色の光に覆われていく。そうして光が身体を完全に覆うと、蒸発するように細かい粒となって宙へと消えていった。



12 聖ブレヒト教会
Römisch-katholische
St. Ruprechtskirche

「行かれましたな」

静寂の中、アダムが呟く。その手には包帯が巻かれていた。

「ああ」皇帝はおぼろげに答えた。その目は、4人の消えた場所を未だに見つめている。

「神よ、あの4人に栄光を！」

つづく

1. *Maria am Gestade (Nico Kaiser)*

<http://www.flickr.com/photos/nicokaiser/8526498470/>



2. *Dinner at the Paulaner Biergarten (Bernt Rostad)*

<http://www.flickr.com/photos/brostad/8109743990/>



3. *Pauly Grazing (Paula Beauty)*

<http://www.flickr.com/photos/71132201@N07/6433515473/>



4. *Jacob Hoefnagel (1609)*

Historisches Museum der Stadt Wien, Inv. Nr. 31043

5. *Andreas Möller (1684–1762)*

Kunsthistorisches Museum

6. *Anonym (zwischen 1723 und 1724)*

Schloss Schönbrunn

7. *Spanische Hofreitschule in Vienna. (rp72)*

http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Spanische_Hofreitschule1,_Vienna.jpg



8. *Francesco Solimena (1657–1747)*

National Museum of Capodimonte

9. *Sir Godfrey Kneller (1646–1723)*

Privately owned by Godfrey Kneller

10. *Unklarheit*

http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Joseph_Emanuel_Fischer_von_Erlach.jpg

11. *Burggarten in Wien (Antonio Morales Garcia)*

http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Wien_Burggarten_HDR.jpg



12. *Église Saint-Rupert, Vienne (Autriche)(Yelkrokoyade)*

http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ruprechtskirche_Wien_bis.jpg



ⁱ ゴシック建築の特徴的建築構造です。

(<http://travelersmedia.com/archives/2705>)

ⁱⁱ 岸辺と言うのは、昔この場所にまでドナウ川が流れていた時の名残です。

(<http://members.aon.at/hwien/meisho/kirche/mariaamgestade.html>)

ⁱⁱⁱ ウィキペディアには、神聖ローマ帝国領土の変遷が良く分かる地図が載っています。(<http://ja.wikipedia.org/wiki/神聖ローマ帝国>)

^{iv} 現在でもケバブやピザに次いで人気があり、お昼にはスーパーなどで切ってもらい、パンに挟んで食べる人が多いようです。

(<http://www.geocities.jp/frauyamada/Leberkaese.html>)

^v この防御壁は街の近代化を図るために取り壊され、今はリングという環状道路になっています。ちなみに、正確にはトルコ軍を追い返したあとにできた壁がこの外側にもう1つありました。地下鉄の6番線が途中から地上を走ってるのはその壁の上を走っているからです。(<http://ja.wikipedia.org/wiki/リングシュトラッセ>)

^{vi} 以前は『冬の乗馬学校』の名の通り、冬にしか公演は見られませんでした。現在では、夏でも『母馬と仔馬のショー』が見られるようになりました。

(<http://www.youtube.com/watch?v=plD3-10h2xc>)

^{vii} このサイトで、屋内馬場の360度パノラマビューがご覧いただけます。

(<http://www.wien.info/de/sightseeing/sehenswuerdigkeiten/panorama-hofreitschule>)

^{viii} 冬の乗馬学校には設立者であるカール6世の肖像画が飾ってありますが、馬場が白で統一されているのは皆の視線を肖像画に向けるためであると言われています。また、入場する騎手は必ずカール6世に一礼して演技や練習を始めます。

^{ix} 英雄広場では、実質最後の皇帝フランツ・ヨーゼフと向かい合い馬に跨るオイゲン公の像が見られます。

^x 市庁舎前の公園にはウィーンに貢献した英雄たちの像がずらりと並んでいますが、その中にエルラッハの父ヨハン・ベルンハルト・フィッシャー・フォン・エルラッハも立っています。是非、見つけてみてください。

^{xi} ここは現在一般に開放されており、モーツァルトの記念碑もそこで見ることができます。ト音記号でできた花のガーデニングには思わず頬が綻ぶことでしょう。

^{xii} 日本はかつて、オーストリアと一度だけ戦火を交えたことがあるそうです。ちなみに、日本が勝利しています。(<http://www.onyx.dti.ne.jp/sissi/episode-30.htm>)

^{xiii} ウィーンの古い教会は、ショットテン教会など、改装されて昔の面影を残してい

ないものが多いが、ルプレヒトは概観だけでも「古いなあ」と感じられます。

(<http://members.aon.at/hwien/meisho/kirche/ruptrecht.html>)

^{xiv} 聖餐式を取りしきる司祭が着る袖のない外衣がカズラです。カズラの色は時と場合によって様々で、紫はその中でも改悛、後悔の色。待降節や、四旬節に着用されます。(<http://ja.wikipedia.org/wiki/祭服>)

白王伝

—神聖ローマ帝国の勇者たち—

<http://p.booklog.jp/book/83439>

著者：*mkSa*

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mksa/profile>

本内容の無断転載を禁じます

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/83439>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/83439>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ